

伝えるということ

日本油化学会 関東支部長 安 増 毅

今年の4月、官房長官の「新しい元号は、『令和』であります」という発表があり、5月に令和という新しい元号の時代が始まりましたが、その元年も早くも年末に向かっていきます。元号の最初は7世紀中半の「大化」とのことですが、以来1400年近くもこういった制度が伝えられて来たというのは驚きでもありますし、私たち日本人にとって当たり前のもので捉えられているのも無理が無いとあらためて思います。今回の改元に関して、新しい元号に対する人々の関心は高く、発表前から新元号の予想等の報道で盛り上がり、墨書をもつての発表直後からあつという間に、令和という文字と言葉が各所で踊りました。また、それが万葉集から取られたということが報道されるや否や、書店の店頭には関連の書籍が山積みになり、売れ行きが普段の百倍以上になったとも言われます。一連の元号報道を見て、受け手の関心があるところでは情報というものは素早く伝わるという良い例と思いました。

一方、この稿を書いている時点で、台風15号による電力等の生活インフラの甚大な被害が伝えられました。被災された方々が1日も早く日常生活に戻れることを祈るばかりです。当初の大方の予想ではこれほどの被害をもたらすとはされておらず、台風通過後かなりの時間が経って停電などの被害が明らかになり、さらに事態が長期化することが分かるにつれ、驚きが増すばかりでした。被災地域で観測史上最大の風速を観測するなど、稀にみる強力な台風であったことが原因であることも間違いないようですが、もし停電等があったとしても1日もあれば復旧するだろうという油断もあったと思います。ところが停電によって通信インフラが使用不能になってしまったことにより、復旧どころか何が起きているかさえ分からない、千葉県内のたかだか70kmの範囲内で、知りたい情報を知りたい人が知ることが出来ない状況が作り出されました。思いもかけないインフラの崩壊には余りにも無力ということも分かりましたし、当たり前ですが伝える手段や方法の大切さをあらためて思

い知らされた出来事でした。

話は変わりますが、油化学会の活動の中でも「伝える」ことは非常に大切なことです。論文誌や年会、学術部会等など、学術成果を同じ研究分野の人々に伝え、議論する場を提供することは存在意義そのものと言ってよいかもしれません。これに対し、支部には地域の専門分野の異なる方や一般の方に油化学分野での研究成果や意義をお伝えし、理解していただいた上で、様々な角度からの応援を頂けるようにする役割もあると考えています。この目的のために、私が所属する関東支部では年3回のセミナーを開催しております。第1回は、どちらかというところ、研究者、技術者向けの講演会です。油化学会の存在や活動を知って頂くために会員以外の方にも参加頂くための試みとして、数年前から油化学に限らず広い分野から、例えばAIなど旬の話題を選び、これに対する企業や機関の取り組みを紹介頂くスタイルとしましたが、参加者数を見る限りある程度成功しているようです。第2回セミナーは、東京以外の都市で開催し、一般の方向けの内容で油化学が生活に関わる話題を取り上げ、油脂技術への理解を進めて頂く機会としています。ただ、一般の方に開催の情報が行きわたるようなPRの方法をもう少し工夫したいと思います。第3回目は、少し趣を変えて、支部の若手会員を応援する目的で設けられた若手研究者奨励賞の受賞者講演会として開催しております（次回は1/24予定）。

ところで、今年から関東支部のHPを開設致しました。そこではご紹介した3回のセミナーの案内の他、例えば次世代を応援するために、若手研究者奨励賞受賞者のその後の活動についても掲載することにしています。また、双方向の情報交換や中高生向けの情報発信などWEB上の企画を行うことなども検討し、会員はもとより、会員以外や一般の方との接点として利用し、その他の手段も組み合わせて、伝える力をさらに強めて行きたいと考えています。

(花王株式会社)